



TITLE:

外國文献

AUTHOR(S):

CITATION:

外國文献. 日本外科宝函 1925, 2(5): 843-852

ISSUE DATE:

1925

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193179>

RIGHT:

外國文獻

外科ニ於ケル「インシュリン」ノ意義

Die Bedeutung d. Insulins f. Chirurgen. Dr. Gerhard Dittmann. Zentralb. f. Chirurgie. Nr. 40 1924.

糖尿病患者ニ於テハ麻酔並ニ創ノ治癒不良ノ爲ニ手術ノ危險ナルノ事實ハ手術ニ際シテ不確實ナ感ヲ起サシメ其豫後ヲ定ムルニ常ニ特別ノ注意ヲ拂ハザル可カラズ又糖尿病者ノ術後ニ不良ノ合併症起ルガ爲ニ外科の治療ヲ要スル總テノ患者ニ檢尿ヲ行ヒ若シ糖尿病者ナレバ手術前成ルベク糖及「アチエトン」尿ヲ治癒セシメ以テ合併症ニ對シ抵抗ヲ強カラシムルヲ要ス。

食餌療法ハ一般ニ行ハル、モ長時間ヲ要シ急ヲ要スル手術時ニハ實行シ難ク又食餌療法ヲ誤ランカ糖尿病ノ如ク患者ニ害ヲ與フル疾患ハ他ニ之ナシ遺憾ナガラ輕症糖尿病モ奏効セル前治療モ術後「コーマ」ヲ防キ得ザルコトアルハ事實ニシテ小手術或ハ精神的「ショック」ニ由テ再ビ糖排泄ヲ來スコトアリ。

「インシュリン」ノ發見ハ此點ニ於テ變化ヲ來セルカ如シ純食餌の治療ニ依テ急速ニ糖排出ヲ消失セシムルコト能ハズ從テ「コーマ」ノ危險起リ易キニ拘ラズ「インシュリン」ニ依テ短期間ニ「アチエトン」及糖ヲ消失セシムルコトヲ得又術後「コーマ」ヲ殆ド確實ニ豫防シ若シ起ルモ之ヲ治癒セシム從來ノ經驗ハ「コーマ」前驅期或ハ其危險狀態ニ於テモ「インシュリン」治療ハ著効ヲ奏シ且恐レベキ糖尿性環道ヲ底止シ敗血症ヲ豫防スルヲ示セリ。

使用量ハノールデンノ記載セル如ク少量(三〇單位ヲ超ユベカラズ)ヲ反復シテ與フルヲ最良トシ各注射ノ間ニ少クトモ三時間ヲ置クベシ唯ダ「コーマ」ノ來ラントスルカ或ハ其既ニ現ハレタルトキニノミ分量ヲ増加シ且靜脈内ニ與フルコトヲ得若シ可及的強力且迅速ノ作用ヲ欲スレバ食餌中ヨリ蛋白成分

ヲ成ルベク減少シ且含水炭素ヲ制限スベシ。

「インシュリン」治療ハ全ク危險ナキニ非ザルガ故ニ有効ニシテ危險ナキ治療ガ臨牀裝置、血糖及尿糖ノ定量測定ナクシテ實地家ニ實行シ得ベキハ必要ノ疑問ナリ是ハヤクシニウウルテンホルストノブラーグ内科臨床ニ於ケル多數ノ試験ニ據テ肯定スルコトヲ得即チ單ニ糖検査法ニ依テ尿中ノ糖ヲ一—二時間定性的ニ檢スレバ足ル是ハ疾患ノ程度ヲ測定スルモノナルコトヲ理解スレバ過量ノ危險ハ大ナラズ過量現象即充奮狀態心機亢進振顫及脈搏増加ノ如キハ速ニ識別スルヲ得含水炭素輸入殊ニ「デキストリン」靜脈内注射ニ依テ確實ニ除クコトヲ得又「インシュリン」注射ノ急激ナル中止ハ惡結果ヲ惹起シ得ルガ故ニ術後注射ヲ繼續シ徐々ニ廢止ス可キナリ。

適應症 糖尿病者ノ外科の合併症ハ總テ「インシュリン」治療ノ適應ニシテ之ニ依テ從來疑問トセラレタル手術ヲモ可能ナラシメ且傳染ノ豫防及治療トナル。

吾人ハ又理論上含水炭素「トレランツ」低キ甲状腺腫患者並ニ長時ノ麻酔及重篤ナル手術的「ショック」ニ由テ身體ノ酸過剰トナレル者ニモ「インシュリン」ニ依テ效果ヲ期待スルコトヲ得余ハ事實多數例症ニ於テ「インシュリン」ノ少量ト共ニ「グリコーゼ」ノ靜脈内及皮下注入ニ依テ新陳代謝著シク變化セシムルコトヲ得タリ術後「アチドーシス」症狀ヲ有スル患者ニ五〇%葡萄糖溶液ノ二五c.c.ヲ先ツ靜脈内ニ注射シ同時ニ葡萄糖ノ生理的溶液ヲ皮下ニ注射シ約五分ニシテ「インシュリン」ノ五—一〇單位ヲ筋肉内ニ注射シタルニ患者ハ著シク回復シテ脈搏緩徐充實シ呼吸ハ深く且平靜トナリ輕度ノ發汗ヲ伴ヘリ「インシュリン」ハ乳酸「アチエト」醋酸及「Bオキシブッター」酸ノ酸化ニ影響スルカ如シトノトエーニツモンノ理論ニ從ヘハ麻酔後「アチドーシス」

ニ對スル「インシュリン」ノ良好ナル作用ヲ説明シ得ベシ。

ガッペノ指示セル如ク「インシュリン」ノ少量ハ含水炭素ヲ同時ニ輸入シタル際「グリコーゲン」ヲ可燃性糖ニ變化スルヲ妨ゲ且時トシテ含水炭素ヲ貯藏シ得ルガ如シ。

要之「インシュリン」ハ糖尿病者ノ術後合併症ノ治療ニ向テ外科醫ニ有力ナル武器ヲ提供シタリト云フコトヲ得。(山内)

靜脈内注射ノ技術ニ就テ

Zur Technik der intravenösen Injektion (Ueber eine stets brauchbare Injektionsstelle, die Vena jugularis externa.)

von Dr. T. Benedek Hautarzt in Leipzig-Münchener

Medizinische Wochenschrift

Nr. 15-10. April 1925 S. 508

靜脈道ニ藥品ヲ入レル際屢打チ勝ち難イ困難ニ遭フコトガアル、最屢注射部位トナル肘靜脈ハ場合ニヨリ甚ダ見出し難ク、或ハ甚ダツノ發育ガ惡イコトガアル。

靜脈注射トシテ最も多イノハ實地上臨微療法デアルガ之ノ際一度靜脈外ニ漏ラスト患者ハ痛ニコリテ療法ヲ中止シヲ了、著者ハ注射部位トシテ右或ハ左ノ外頸靜脈ヲ用ヒテキル。

操作 患者ヲ水平ナ手術臺ニ仰臥位ニ置キ頭ヲ右或ハ左ニネデラセル、スルト胸鎖乳頭筋ノ表面ニ之ト交叉シテコノ靜脈ガアラハレル、デコノ側頭部ヲ普通ノ通り消毒シテ患者ニ口ヲ閉シテ少シキバル様ニ命ジル、スルト外頸靜脈ガ鉛筆大位ニナツテアラハレル、コレヘ血流ノ方向ニ普通ノ如ク注射スルノデアル、注射スル際ニハ患者ニ口ヲ開カセテ樂ニ呼吸セシメテヲク。

著者ハ斯様ニスレバ何等ノ危險モ困難モナク樂ニ注射ヲナシ終ルト云ヒ以

テ多數ノ患者ニ應用シテキルト云フ。(辻村)

八四四 (第五號 一四四)

サルバルサン皮膚炎ニ就テ

Ein Beitrag zur Kenntnis der Salvarsan Dermatitis
Von Dr. Hans Kaiser

Wiener medizinische Wochenschrift Dezember 20, 1924

「梅毒ニ對スル水銀サルバルサン療法ノ結果表ハレル種々ノ皮膚現象即輕度ノ潮紅疹時ニハ廣汎性ノ壊死及潰瘍形成進ンデハ死ノ轉機ヲ取ル事サヘアルガカ、ル所謂サルバルサン皮膚炎ト云ハレテルモノニ對シテハ非常ナル興味ヲモツテ各方面ヨリ報告サレテ居リ又ツノ病因ニ就テモ種々ナル意見ガ發表サレテ居リマス」ト云フ前置キヨリ初メテ著者ハ各方面ノ意見ヲ引用シテ居リマス即チ病因ハサルバルサンニ含マル砒素成分ノ中毒デアルトカ或ハ砒素ト水銀トガ同様ニ働クモノデアルトカ或ハ反ツテ水銀ガ主ニ作用スルトカト云フ様ナ色々ナ説ヲ並ベツノ後ハ自分ノ見タ八例ニ就テ詳細ナル經過ヲ書キツラネ最後ニ「私等ノ觀察及診察經驗ニヨレバ」トシテ結論デムスンデ居リマス、ソレニヨレバ—

(一) 驅梅毒療法ノ經過中ニ起ル皮膚ノ現象ハ中毒性ヲ有ス。

(二) 我々ノ觀察ト診察ニ基キ皮膚炎ノ原因ハサルバルサンニ含マレテル砒素成分デ水銀ハ殆ンド作用シナイ少クトモ我々ノ例ニ於テハ水銀中毒ニ對スル現象ハ證明出來ナカッタ。

(三) 皮膚炎ノ影響ガ梅毒ノソノ後ノ經過ニ有効ニ働クト云フ說アルモ是ハ確實ニハ證明出來ヌ様ニ思フ。(渋谷)

オルトオキシベンチールアルコホルノ局所
麻醉作用ニ就テ

Über die lokal-anästhetische Wirkung des Oxybenzylalkohols.
von Prof. Dr. G. Joachimsen und Dr. Zeltner.
Zentralblatt für Chirurgie. Mai. 1925.

コノモノハ水楊皮中ニ存スル糖源體カラ得ラルル白色ノ結晶性ノ物質デ攝氏八十六度ノ溶解點ヲ持ツ水ニハ通常ノ溫度デ(十八度)六%マデ溶ケル尙高キ溫度デ一層溶ケ易イ局所麻酔藥ハ消毒セラレ得ベキモノデ即チ高度ノ熱ニ堪ヘルモノデナケレバナラヌ「オルトオキシベンチルアルコホル」ノ水溶液ヲ一時間百度デ熱スルト分解ガ起リ樹脂様ノモノト變化スル所ノ中間體「サリレチン」ヲ成生スルガ此ノ弊害ハ消毒ノ際水素イオン「濃度」ヲ變化サス事ニヨツテ除去スル事ガ出來ル「オルトオキシベンチルアルコホル」ノ藥物學上ノ性質ニ關シテハ次ノ通りデアル一、八%ノ液ノ上皮内注射(前膊)後直ニ知覺麻痺ガ起リ約三十五分間持續スル尙強度ノ液ヲ注射スルナラバヨリ長時間ノ知覺麻痺ガ起リフョーデノ報告ヤアメリカノ研究者達ノ實驗ト一致シテ居ル Minnesota 大學ノ外科醫等ハ二%液應用ノ下ニ扁桃腺切除趾ノ切斷ヘルニア等ヲ所置シタ口腔鼻粘膜ニハ十二%液ノ塗布ニテ表面知覺麻痺ガ起リ尿道膀胱粘膜ニハ四%ノ液ガ應用サレタアメリカノ研究者ノ報告ヤフョーデノ實驗ヲ今日マデ獨逸ノ醫師ガ應用シナカツタノハ恐ク消毒ニ際シテ困難ノ爲デアツタラウガ上述ノ通り水素イオン「一定ノ濃度」中デハ熱ニヨツテ變化スル事ナク消毒シ得ルノデアル局所麻酔論スル上ニハ局所麻酔ニ加フニ中樞神經ニ及ボス作用ヲ注意スベキデアル「コカイン」及其化學上類族體ハ中樞神經系統ニ作用スル毒素デアル「オルトオキシベンチルアルコホル」ハ家兔皮下注射ニ於テ「コカイン」ヨリ約二十分ノ一ノボカインニ比シテ約八分ノ一ノ小毒力ヲ示シテ居ル又犬ノ腰椎注射ノ實驗ヨリ此物ノ毒力僅少ナル事ガ明デアル是等ノ實驗及文獻ノ報告カラ此ノ物ハ外科ニ於ケル局所麻酔藥トシテ期待シテ使用スル事ガ出來實際上ノ應用ヲ推稱ス。(猪口)

蟲樣突起炎ト蟻蟲

(Aperiticitis und Oxyuren Von Dr Hermann steichele)
Archiv für klinische Chirurgie Dr. P. v. Langenbeck

蟲樣突起炎ノ原因ハ色々アルモ腸内寄生蟲ガ原因ヲナスハ事實ニシテ殊ニ蟻蟲ハ主ナルモノデアル著者ノ統計ニヨルニ蟲樣突起炎ニテ手術セシモノ、少クトモ十パーセントハ突起内ニ蟻蟲ヲ證明セリ、本病ハ蟻蟲ノ分布區域ニ多ク二十歳前後ノモノニ多ク且女ニ多イ様デアル、コレハ女ニハ婦人科疾患アルコトニ原因セルナラン。

蟲ハ粘膜層内デ粘膜下組織ニ近ク能動的ニ這込リコミ蟲體ノ方向ハ粘膜ノ方向ト一致シソノ周圍ニ炎症竈ヲ作り、蟲體ノ運動ニヨリ蟲樣突起ノ癰癰的收縮ヲオコシ激シキ疼痛ヲオコス蟻蟲ニヨル蟲樣突起炎ハ急性慢性何レモ存在スルガ他ノ原因ニヨリオコルモノトソノ症狀ニ於テ區別スル能ハズ、發熱、疼痛、壓痛點、腹筋緊張、嘔吐等ノ症狀ハ皆存在ス、「エオヂン」嗜好性細胞夥多ハ一般ニ寄生蟲ノ存在セルトキニ認メラル故ニ區別點トナラズ、蟲ノ體內ニ存在スルヤ又セザルヤヲ證明スハ何等診斷ノ助トナラズ、何トナレバ驅蟲法ヲ行フモ突起内ニ潛伏セル蟻蟲ハコレヲ驅逐スルコト能ハズ、要スルニ驅逐法ヲ試ムルコトナク普通ノ蟲樣突起炎ト同様ニ期ヲ以テ手術ヲ行フベキデアル。(竹田)

慢性蟲樣突起炎ノ診斷ニ就テ

Zur Diagnose der Appendicitis chronica. von Prof.
B. Przewalsky.
Zentralblatt für Chirurgie No 20 16 Mai 1925

著者ハ十八歳乃至二十二歳ノ若イ人々デ右側腸骨部ニ疼痛ヲ訴ヘル者ノ多數ヲ檢シテ慢性蟲樣突起炎ノ診斷ニ價值アルト思ハレル診斷上ノ一針針ヲ得

タ。(一)鼠蹊韌帶ノ上方ニ平タイ淋巴腺ノ腫張ト右側腸骨廻旋動脈ノ邊ノ組織ノ腫張デアル著者ハ屢々是等ノ僅カノ變化モ無痛性ニ觸診シ得タ(二)右側腸骨動脈ノ外側ノ腸骨筋ハ常ニ左側ノ夫ヨリモ平坦デアツテ其ノ厚サハ淋巴腺腫張アルモ尙ホ然リ。之ハ恐ラク腸骨筋ヲ支配スル N. cruralisノ枝ノ炎症ト關係シテ萎縮ヲ來シタ爲デアラウ。此萎縮ノ結果ハ自然作用障礙ヲ來ス。次ニ述ベル方法デ試験スルト健者ニアツテハ左右共ニ二分間或ハ夫レ以上出來ルガモシ腸骨筋ノ萎縮ト腸骨廻旋動脈邊ノ腫張アル場合ニハ十五秒乃至夫レ以上ノ差ヲ來ス。

被檢者ニ兩側下肢ヲ伸展位トシテ仰向ニ臥カシ兩膝間ノ開キヲ手掌巾トシ檢者ハ被檢者ノ踵ヲモツテ診察臺上足巾ノ距離ニ保チ檢者ガ其ノ手ヲ離シタ瞬間カラ計算スルノデアル。

此ノ方法ヲ以テ著者ハ慢性蟲樣突起炎ノ診斷ニ價値アルモノトシテ推賞シテキル。(都谷)

新診斷法ニヨル附屬器炎ト急性蟲樣突起炎トノ鑑別

Differentialdiagnostische Möglichkeit zwischen acuten Appendicitis und Adnexitis mit Hilfe einer neuen Untersuchungsmethode Von Dr. Eugen Sattin.
Deutsche Zeitschrift für Chirurgie, October 1924.

子宮附屬器炎ヲ急性蟲樣突起炎ト間違テ手術スル事ハ治療上注意スベキ事デス様ナ誤診ヲ余ノ方法デ防グ事ガ出來ル是マデ驚ク程ノ結果ヲアゲテ居ル余ハエレルスタトノ叙述蟲樣突起炎ノ際ハ腸腰筋ノ單獨作用消失スル事ニ端ヲ發シ腸腰筋ノ解剖の生理的狀態ヲ追究シタ腸腰筋ハ既知ノ通り三ツヨリナル腸骨筋、大腰筋、小腰筋、腸腰筋ノ作用ハ二ツヨリナル一、上腿ノ屈曲(股

ニテ外方ニ移動ス)二、胴部及骨盤ノ屈曲(上腿前方ニ固定サレタル際)上腿ノ屈曲ニハ尙縫匠筋、耻骨筋、直股筋モ一程度マデ干與ス其他股鞘張筋モアルソレデ足ヲ或ル角度ニ上ゲル事ガ出來ル尙進ンデ掲ゲル際ハ腹壁筋モ役ヲツトメル腸腰筋ノ單獨作用ヲ知ルニハ上體ヲ坐シ上腿ノ軸ニ足ヲ横ニ水平ノ位置ニオイテ目的ヲ達ス此骨盤位ニ於テ縫匠筋、直股筋、股鞘張筋ハ完全ニ弛緩ス吾人ハ患者ヲ床ノ上ニ真直ニ置キ足ヲ延バシテ居ル際ニ伸シタル右ノ足ヲ上ニ掲ゲシム患者ハ是ヲナシツ、股關節ヲマゲルコ、ニ於テ單獨腸腰筋作用ヲ了解スル診斷上ニハ足ヲ伸バシテ居ル事足ノ補助筋ハ作用シテ居ナイ事ガ必要デアル大抵患者ハ痛ミアル腸腰筋作用ヲ補助筋ニテサ、エンガ爲ニ上體ヲ後方ニマゲルソレデ助手ガ患者ノ背ヲ手デサ、エテヤラナケレバナラヌ足ヲ掲アシメルト健康人ハ小ナル角度ニアゲル患者ハ一層弱キ角度ニアゲル此際患者ノ足ヲトラエ尙強ク掲ゲ腹部ノ疼痛點ヲ知ルノデアル其ノ點ハ兩腸骨前上棘間ノ右ノ三分ノ一ノ境界點デ蟲樣突起點ト名ヅケテ居ル此検査方法ヲナスニ當テハ腰筋ト腹壁トノ間ニ盲腸ヲ壓スルノデ余ガ是マデヤツタ多數ニ於テ誤ガナイ尙進ンデ婦人病ニ於テ子宮附屬器炎ノ際ハ異リタル場所ニ疼痛點ガアル即チ此ノ診斷法ノ下ニ子宮附屬器炎ノアル人ハ余ガ子宮附屬二點ト名付ケタル場所ニ疼痛ヲ覺ユ此點ハ二等邊三角形ノ下ノ端ニアタリ其ニ等邊ノ脚ハ兩腸骨棘間ノ線ノ三分ノ一ノ長サデ底ハ此脚ノ半分ノ長サデアル此ノ検査ハ腸腰筋ノ障害或ハ病腔髓病潰瘍等ノ際ハ行フ行ガ事ガ出來ヌ以上ノ方法ニ依リ鑑別シタル數例ヲアゲテ居ル。(猪口)

空腸ニ於ケル消化性潰瘍ノ成立問題ニ就テ

今日尙不明ナル手術後ノ消化性空腸潰瘍ノ成立問題ニ付テハ説明ヲ與フベキ種々ノ記載アリ經驗及實驗ニ由リ本潰瘍ハアイゼルベルヒドヤン氏ノ噴門曠置並ニ胃腸縫合術後ニ操作ノタメ縫合サレシ腸管ガ胃液ノタメ高度ニ犯サルヲ認ム、噴門閉塞又ハ噴門狹塞ノ際生ズル潰瘍ニ付テノ條件ハ吾人ニ已ニ

明ナルモ主因ヲ酸性胃液ニ求ムルナラ誤ナリ、吾人ハ進デ他ノ原因ガ存スルヲ知ル蓋シ空腸消化性潰瘍ハ胃ノ手術殊ニ胃酸缺乏又ハ無酸ノ物ニテモ認ムル故ナリ尙本潰瘍ノ成立ニ參與スベキ循環障害並ニ胃腸壁障害及之ニ類似ノ物ハ此處ニ論ゼズ近來「エンデルレンフレンデンベルヒ」及「フォンレドウィツ」ハ胃腸ノ手術後ニ於ケル消化性變化ニ付テ實驗的研究ヲ遂ゲタリ此實驗ニ由ルニ程度ノ如何ヲ問ハズ盲管形成ノ操作ハ甚シクトリフシン消化液ノ鬱滯ヲ十二指腸及噴門ニ促進スルノミナラズ噴門曠置後ニハ胃底ノ空分泌ヲ増加シ消化液ト共ニ胃腸縫合脚ニ於テハ十二指腸及胃壁並ニ胃腸縫合輪ニ於ケル病的變化ニ惡影響ヲ及ボス。

進デ尙理論的討究ニ進マズシテ空腸消化性潰瘍成立ノ狀態ニ於ケル胃腸縫合術ノ種々ナル形式ヲ檢スベキ研究ニ論ヲ進ムルニビール氏ニ由レバ順蠕動性後胃腸縫合術ノ際ニハ人工的ニ彎曲生ジ由テ十二指腸内容ノ鬱滯ガ促進サル且ツ「メーヨー」及「ビルヘル」モ同様ノ見解ヲ有ス順蠕動性位置ハ不正ノ位置ト稱サル吾人ハ犬ニ於テ胃腸縫合術ヲ種々ナル形式ニテ行ヒシモ他ノ諸大家ノ結果モ證明セル如ク通常ノ順胃腸縫合術後ニハ潰瘍ハ生ゼズ且ツシユミリスキー氏ニ由ルニ胃腸縫合術ノ際ハ病的變化ヲ認メズ。

之ニ反シテ蠕動性手術ノ際ハ吾人ハ二回ノ實驗ノ下ニ常ニ下方ノ腸管ニ消化性潰瘍ヲ認メタリ。

此實驗ニ基キテ空腸消化性潰瘍ニ對スル何等カノ結論ヲ得ル事ハ可能ノ事ト思ハス。

反蠕動性胃腸縫合術ハ流出ヲ妨ゲ且ツ鬱滯ヲ來シ易ク由ツテ消化性空腸潰瘍形成ヲ促進スルヲ得ル物ト信ズ。

シユミリスキー氏ニ由レバ反蠕動性胃腸縫合術ニ於テサヘ逆行ガ存在セメ事實ヨリ推シテ潰瘍成立ニハ尙胃腸運動性機能障害が必要ノ様ニ思惟サル、故ニ健康狀態ノ腸自身ハ若シ全部閉塞セラレザレバ蠕動的ニ内容ハ排泄セラ

ル、物ナリ。(餘略)

特發性脱疽ノ發生機轉ニ於ケル副腎ノ意義ニ就テ

Dr. med. Cuntzjew.

(Zentralblatt für Chirurgie 9. Mai 1925.)

オツベル氏ハ特發性脱疽ノ生成原因ハ副腎ノ機能昂進ニアリト考フベシトナス。即チ副腎機能昂進ハ惹ヒテ、アドレナリン過多症ヲ招來シ、次デ血管痙攣、次テ血管壁變化、血液輸送ノ不足、遂ニ脱疽ニ到ルモノト考フ。故ニオツベル氏ニヨルバ特發性脱疽ノ根本的療法ハ副腎切除ニアリ。普通、達シタル特發性脱疽ニ於ケル血液検査成績ニ就テハ其後種々ノ議論アリ。ストラ Dein 氏ハ該患者ノ血球及血清ヲ檢セルモ、何等血管收縮物質ノ増加ヲ證スルヲ得ザリキ。

加之反對ニ多クノ場合ニ於テハ却ツテ特發性脱疽ニ於テ副腎ノ機能低下ヲ考ヘザルベカラズ。

ダチノワ氏ハ副腎切除ノ後六週ニシテ血管收縮物質ノ増加ヲ血中ニ見タリ。余ハ逆ニ特發性脱疽ヲ副腎移植ニヨリ處置セリ患者ハ三十七歳ノ男子ナルガ、皮下ニ犬ヨリ得タル副腎ヲ移植セルニ二日ニシテ足部溫トナリ疼痛消失セリ、後癰痕ヲ形成シテ治癒セリ。

コノ例ハ副腎ノ機能昂進ガ特發性脱疽ノ成立ニ須ルトイフ假定ヲ疑ハシメ、寧ロ機能低下ヲ考ヘシムルモノナリ。

此ノ外ノ二例ニ於テ犬ヨリ得タル副腎ノ移植ノ後、疼痛消失、皮膚充血、肉芽新生ヲ促進シテ其果ヲアグルヲ得タリ。(二見)

脾臓ノエオチン嗜好細胞過多ニ對スル關係

von Mavr und Moneropy aus der Klinik der Universität München.
Münchener Medizinische Wochenschrift No. 17 1925.

脾臟機能ト「エオデン」嗜好細胞過多トノ關係ニツキ報告サレタコトガ極メテ少イ。エールリツヒハ脾臟摘出後第二年ヨリ數年間「エオデン」嗜好細胞過多ヲ來スト言ツテラル。

傳染性疾患デハ屢脾臟肥大及ビ「エオデン」嗜好細胞數ノ變化が見ラレル、例ヘバ「腸チフス」デハ脾臟肥大ヲ伴ヒ「エオデン」嗜好細胞ハ全ク消失ス、「マラリヤ」デハ脾臟肥大及「エオデン」嗜好細胞ノ消失ガアル。又、皮膚疾患デハ屢「エオデン」嗜好細胞過多ガアル。

脾臟摘出ガ「エオデン」嗜好細胞數ニ對スル影響ヲ見タ、「エオデン」嗜好細胞ハ摘出後徐々ニ増加シ四十日乃至五十日目ニ、其ノ最高頂ニ達ス、試験動物ノ三分ノ一ハ此ノ時死ス。

此ノ際ニ蛋白除去ヲナセル脾臟液ヲ注射スル時ハ「エオデン」嗜好細胞ハ著シク減少シ、脾臟液注射ヲ續クル時ハ正常ノ「エオデン」嗜好細胞數ニ迄減少セシメルコトガ出來タ、然シ脾臟液ガ「エオデン」嗜好細胞數ヲ減少セシメルコトハ一時的デアツタ。「エオデン」嗜好細胞過多ヲ伴フ皮膚疾患ニ對スル脾臟液ノ作用ヲ見タ。第一回ノ注射ニヨリ「エオデン」嗜好細胞數ヲ著シク減少セシメタガ此ノ作用ハ一時的デ六―七時間後ニハ舊ニ復ス疥癬デハ「エオデン」嗜好細胞數ガ二十六%ヨリ六%ニ減ジタ。

第二回注射ハ二ツ相異ナル結果ヲ得タ、一ハ「エオデン」嗜好細胞ノ減少ガ急激ニ來ルガ他ハ極メテ徐々ニ現ハレル、殊ニ興味アルハ「エオデン」嗜好細胞數ガ減少スル時ハ痒感ガ消失シ、「エオデン」嗜好細胞増加スル時ハ痒感モ亦増大スルコトデアル。又組織學的研究ヲハルニ、脾臟液ハ疥癬浸潤部ノ「エオデン」嗜好細胞數ヲ著シク減少セシメル。

之ヲ要スルニ、脾臟機能ト「エオデン」嗜好細胞數トハ密接ノ關係アリ。

1. 脾臟摘出或ハ病的作用ニヨリ脾臟機能ノ障害或缺損セラレタ時ハ「エオデン」嗜好細胞ノ増加ヲ來ス。

2. 脾臟機能ノ昂進セラレタ時ハ「エオデン」嗜好細胞ノ減少ヲ來ス。

3. 「エオデン」嗜好細胞ハ脾臟機能ノタメニ其ノ新成ヲ妨ゲラレルカ或ハ既ニ形成セラレタモノガ破壊セラレルカ未決定デアル。

4. 多クノ皮膚疾患ハ「エオデン」嗜好細胞ノ過多ヲ伴フ、之ハ脾臟ニ中樞ヲ有スル内分泌作用ノ障害ニヨツテ來タノデナイカト想像セラレル。
(飯島)

攝護腺癌ノ臨床的診斷ニ就テ

Zur klinische Diagnose des Prostatacarcinoms von Karl Plicker.
Zeitschrift für urologische (Hirurgie.) (Kloher 1924.

攝護腺癌ハ豫想外ニ小サイ腫瘍ガ早期ニ轉移ヲ起シ特ニ骨系統ニ來ル際腫瘍ガ小サクテ原發病電ノ診斷ガ困難デアル、轉移腫瘍ハ骨盤局所の障害力或ハ神經根部ノ壓迫ニ依リ放散性ノ疼痛ヲ來スヨク坐骨神經痛ト間違ヘラル轉移ガアツテ正シキ診斷ガ出來テモ根治的療法ハ困難デアルガ、然シ無益ノ治療方針カラマヌガレル事ガ出來ル、原發病電ノ症狀ガ缺ゲテオル際ハ「レントゲン」像ニヨツテ診斷ガ明ニナル、次ニ一例ヲノベテ居ル原發病電部ノ障害少キ爲最初坐骨神經痛ト誤診サレ治療中骨系統ニ轉移ヲ來シ(鎖骨)源部及足ノ頑固ナル疼痛等ニヨツテ推定的ニ攝護腺癌ト診斷サレタ攝護腺ノ變化ハ只鉛筆軸大ノ索狀體ヲ觸ル、ノミデ何等苦痛ナク死後解剖所見ニ於テ判然トナツタ此例ニ於テ骨盤ノ「レントゲン」寫真ガ驚クベキ像ヲ呈シ左骨盤骨及腰推下部兩上腿骨ノ上部ガ高度ノ瀰漫性ノ斑點狀ノ透明度ヲ呈シタ、此ノ著明ノ狀態ハ骨系統原發病トノ鑑別診斷トナル此ノ際多發性骨腫瘍ガ疑問トナルノデアル。ガ是ハ尿ニピンスヂヤウネス氏ノ蛋白體骨系統特ニ肋骨胸骨頭蓋骨ニ於ケル疼痛多發性骨折ノ傾向「レントゲン」像ハ個々ノ分レタル円キ多數ノ透明點ヲ見ル此ノ狀態カラ轉移物ノ區別ガ出來ル、前記ノ例ハ小腫物ノ割合ニ莫大ノ轉移ガ早期ニ起リタルモノデ病理解剖的ニ鑑別サルベキ小サキ攝護腺癌ガ早期ニ蔓延轉移ノ傾向アル事ガ明白デアル、高年ニ於テ疑ハシイ利

尿困難同時ニ前例ノ様ニ廣キ部ノ苦痛ガ坐骨神經痛ノ如キ狀態ニ於テハ廣ク「レントゲン」像ヲトル事ガ必要デアル、骨ニ轉移スル攝護腺癌ノ場合ニハ骨盤ト腰部ノ撮影ヲ推稱ス、又或疑ハシキ腫物特ニ骨格鎖骨ニ於ケル場合ハ泌尿器ノ検査ヲ企テル事モ必要デアル。(猪口)

先天性兩側肩胛關節不全脫臼

Die angeborene doppelseitige Schulterluxation

Von

Dr. Leopold Försch

Klinische Wochenschrift, 9. April 1925

近來不具者療養院ヤ整形ノ外來ニ於ケル患者ノ數ハ著シク増加ヲ示シテオ
ル。カ、ル狀態ナル故自然吾人ハ未ダ文獻ニアマリ精細ニ記載サレテオラヌ
肩胛部獨特ノ畸形ヲ見ルコトガ多クナツタ。カラシテ其ニ就テ少シク述ベテ
ミヨウ。

(例) 異ツタ家庭ニ育ツタ三人ノ子供ニ就テ考察シタノデアル、即十三歳
ノ男兒十三歳ノ女兒、十歳ノ女兒デ就中十歳ノ女兒ニテハ彼女ガ安靜位ヲト
ルトキニハ上膊骨ノ頭部ハ一極モ前方ニ飛出シ然モ普通ノ關節窩ヨリ少シ下
方ニアリ之ガ爲ニ三角筋ノ走り方ニ變化ヲ及ボシテ殊ニ三角筋ノ後方肩峯
部 (akromiotschuit) 及ビ肩胛棘 (spina scapulae) ノ側部ハ鋭ク突出シテキタ
之ハ普通デハ瘦セタ子供デハ唯肩胛部ノ小突起トシテ見ラレルモノデアル、
而シテ特殊デアリ又類症鑑別ノニ價値ノアル事實トシテハ不全脫臼ヲ起セル
上膊骨頭ハ何時モ先天性股關節不全脫臼ノ受動的矯正ノ際ニ起ル雜音ト類
似ノ雜音ヲ以テ矯正シ得タガ然シ正常位ニ固定スル可能性ハ少シモ無カツタ
コトデ矯正スル力ガ去ルト關節窩ノ外側ニ外レテ不正位ヲ取ツタ。腕ノ運動
ハ全ク自由デ尙又其部分ニ於ケル機能ハ何モ異狀ヲ認メナカツタ、其他ノ身

體ノ關節ニハ普通デアツタ神經科ノ Meinel 教授ガ患者ノ肩胛、胸腕筋肉ノ
機能検査ヲ行ヒシガ何等異ル所見ガナカツタ、殊ニ三角筋、僧帽筋ニハ絶對
ニ變化ナカツタ、筋肉ヲ觸診スルト僧帽筋及ビ棘上筋ニ至ル迄何等萎縮及發
育不全ヲ見ナク唯之等ノ筋肉ノ力ガ少シ弱クナリオルバカリデアツタ。コノ
棘上筋ハ腕ヲ外側ニ舉ゲタトキニ上膊骨頭ヲ固定スルニ重要ナル役目ヲナハ
モノデアル。何トナラバ其ノ附着點ノ關節ノ近デ Tuberculum majus デアル
カラデアアル。此ノ子供ニ於テハ尙隨意的ニ上膊骨頭ヲ後方ニ脫臼セシメウル
ヲ見ルコトガ出來タ。「レントゲン」所見ニヨルト鳥喙突起 (proc. coracoideus)
ノ發育不全及關節窩邊ノ不分明ナルヲ發見シタガ上膊骨頭ニハ異常ヲ認メナ
カツタ。

三人子供皆既往症トシテハ普通ニ產レ外傷ヲ受ケシコトナク小兒性麻痺ニ
カ、ツタコトガナギ、又家族ノモノデカ、ル畸形ヲ有スルモノガナイ。而シ
テ三人ノ内一人ガ體操ノ際肩胛關節ガ弛ムヲ注意シタガ他ノモノハ子供自身
モ親連モ Anomalie ニ氣付カナカツタデ、之ハ先天性兩側肩胛關節不全脫臼
デアル。兩足ノ關節トモ同ジ程度ノ解剖學的ノ變化アリ丁度先天性股關節不
全脫臼ヲ想起セシムル。然モ解剖學的及ビ臨床的ニ外傷或ハ神經麻痺ニヨリ
テ起ツタト云フ根據ヲ與ヘズ又即先天性ノモノト考ヘネバナラヌ。

コノ成因ニ就イテハ先ツ原因ノ考察ヨリスレバ機械的成因說特ニ子宮内ノ
加重說ガ唱ヘラル。丁度吾人ハ頭蓋側彎症及先天性斜頸ノトキニ子宮内ノヲ
唱ヘルト同ジク。

解剖學的考察ヨリスレバ肩胛筋ノ狀態ハ此ノ成立ニ關シテ重大ナル意義ヲ
有スルモノデアル。(貴志)

左心耳ニ於ケル癭麻質斯性障害

Rheumatic Lesions of the Left auricle of the Heart

急性癩癩質斯ノ病理學的解剖ニ就テハ近來非常ニ議論多クアシヨフ氏及ソ
ノ他各方面ヨリ心筋、心囊、内膜ニ於ケル特殊性變化ニ就テ發表サレテ居リ
マス、所謂アシヨフ氏ノ小體ナルモノハ左心耳底ノ心筋ニ於テ最も多ク表ハ
レル様ニ記載サレ著者モ又はハ認メテ居リマス、事實ソノ小體ナルモノハ時
ニハ肉眼ニモ白色斑點トシテ容易ニ見得ル位ノ大サヲ有シテル事モアリマ
ス、又最近著者ガ研究シタ癩癩質斯ノ多例中ニ於テハ僧帽瓣ノ後葉ノ上部デ
左心耳ノ壁ガ著シク肥厚シテル事ヲ發見シマシタ是ハアル程度マデ心内膜炎
ノ場合ニ起ル變化ニ類似シテ居マスガ組織ノ新成ト纖維素ノ表面沈著ニヨツ
テ明カニツノ度ハ強イ様デアリマス。顯微鏡的研究ニヨレバ全例ヲ通ジテ心
耳壁及心耳心室中間組織尙冠狀動脈、辨膜底ニ變化ヲ認メマス、最モ著シキ
ハ水腫ト組織新成デアリマス、心耳ノ内層ハ液體及各種細胞ノ浸潤ニヨツテ
肥厚シテ居リマス、大抵ハ單核ナルモ又多核白血球モアリ時ニハ淋巴球モ來
テ居リ中ハ特殊ノ形狀ヲ有スル淋巴球デ充チテ居リマス。然シナガラ、最
モ著シキハ數多アシヨフ氏ノ小體デアリマス、ソレハ大キナ小泡狀ノ核ヲ有ス
ル特殊ナ細胞ヨリナツテ居マス、是丈ノ細胞ハ細カク彈力組織層ノ中ニ入り
込ンデル結果。アシヨフ氏ノ小體ハ帶狀ニ見エテ居リマヘソシテ無數ニ肥厚
面ノ全面ニ波ツテ散在性ニアリマス、時ニハ竇ノ組織及辨膜底ニマデ及ンデ
ル事モアリマス彈力層ノ外側ニハ密ニ各種游走細胞ノ浸潤ガアリ、五六例デ
ハ多數ノ「エラジン」嗜好細胞ヲ認メテ居リマス。

是ハ單ニ癩癩質斯經過中ノ心壁ニ起ル變化ノ一部ニ過ギナク、アシヨフ氏ノ
小體ノ本性ニ關シテハ尙不明デアリマスガ、只定型的ノ大細胞ハ心筋ヨリハ
誘導サレナイト云フ事ガ完全ニ明カニナツタ位ノモノデアリマス。(濱谷)

血管壁ノ營養

Die Ernährung der Gefässwand. Von Fritz Brünig.
Klinische Wochenschrift 1924 Nr. 50 S. 2282.

八五〇 (第五號 一五〇)

血管壁ノ營養、特ニ動脈ニ於テハ三途ヨリセラル。第一ハ血管内ニ流ル、
血液ニヨリ、第二ハ「ワザワゾールム」ニヨリ、第三ハ血管周圍ノ組織液ニヨ
ル。

第二ノ「ワザワゾールム」ニヨルモノハ主トシテ大血管ニシテ小血管ハ主ト
シテ第一、第三ノ途ヨリ營養セラル。即チ血管壁ハ血管腔内外ヨリ營養セラ
ル。

之ノ内外營養ノ境界ハアシヨフ氏ニ依レバ中膜ノ中央ニアリト云ウ。

最近ベトロフ氏及ビランゲ氏ノ動物實驗ニ依レバ内膜中膜ハ血管腔内ヲ流
ル、血液ニヨリ營養セラレ、外膜ハ全ク之ノ支配ヲ蒙ラズ、タゞ「ワザワゾ
ールム」及ビ組織液ニヨリ、營養ノ境界ハ中膜ト外膜ニアリト云ウ。

著者ハ人間ニ於テ之レヲ檢セリ。即チルリイシュ氏手術ヲ行ヘル部ノ血管
ニツイテ檢索ヲ進メタリ。

第一例ハ二十歳ノ女子(皮膚硬變)ニシテ上肺動脈ニルリイシュ氏手術ヲ行
ヒ其結果ヲ示セルモ、術後六ヶ月目ニ肺炎デ死亡セリ。剖檢スルニ手術部ノ
血管ニ何等ノ變化ナシ。中膜モ全ク尋常ナリ。

第二例ハ六十五歳ノ女子、股動脈ニルリイシュ氏手術ヲ行ヒ、十一ヶ月後ニ
死亡セルモノヲ檢スルニ、中膜ハ核ノ染色弱ク「ネクローゼ」ノ像ヲ呈ス同様
ノ變化ハ反對側ノ手術セザル部ニモ見ラレタリ。之ノ事實ヨリ著者ハ中膜ノ
變化ハ手術ノ結果ニアラズシテ、術前已ニ動脈硬變ガ存在セルモノナリト主
張シ、動脈硬變アル場合ニモルリイシュ氏手術ハ血管壁ノ營養ニ何等ノ影響ヲ
與ヘナイト云ウ。

反對ニ高度ノ動脈硬變ノ場合ニハ、血管壁ノ營養ハ非常ニ惡ク「ワザワゾー

ルム」ハ屢深ク中膜、時トシテハ内膜迄モ進入スルコトアリ。之ノ場合ニハ血管壁ノ營養ハ「ワザワゾールム」ト甚大ナ關係アリ。ルリイシュ氏手術後ニ血栓ヲ起スコトハ屢報告セラレタリ。

故ニ高度ノ動脈硬變ノアル場合ニハルリイシュ氏手術ハ行ツテハナラヌ。健康ナル動脈ニ於テハ内膜、中膜ハ血管腔内ヲ流ル、血管ニヨリ營養セラル、故ニ外膜ヲ「ワザワゾールム」ト共ニ切除スルコトハ中膜ニ變化ヲ與ヘズ。外膜ハ「ワザワゾールム」ヨリ營養セラル。

高度ノ動脈硬變ノ場合ハ血管壁ノ營養ハ主トシテ「ワザワゾールム」ヨリナサル。(林)

膽囊撮影術陰影ノ消長

Cholecystography. Appearance and disappearance of the Shadow. Glover H. Copher M.D.

J. a. m. a. Vol. 84 No. 21 1925

「ソヂウムテトラブROOM、フェノールフタレイン」又ハ「ソヂウムテトラヨード、フェノールフタレイン」ヲ靜脈内ニ注射シタル後、膽囊ガX光線ニ對シ一定ノ陰影ヲ生ズルニ至ル過程及其ノ陰影ガ如何ニシテ消失スルヤニ就イテ實驗的ニ結論セリ。

一、陰影出現ノ過程

- (イ) 上記色素ノ靜脈内注射後、膽汁内ニ「プロミン」又ハ「ヨデン」ノ分泌ヲ開始シ膽囊管ヲ通ジテ膽囊ニ入ル、膽囊壁ヨリ分泌サル、コトナシ。
- (ロ) 膽囊ハ膽汁ニ對シテト等シク「プロミン」ニ對シテモ濃縮作用ヲ有ス、而シテ濃縮ニ當リテハ一定時間膽汁ノ膽囊内ニ滯留ヲ要ス。
- (ハ) 濃縮ノ結果膽囊ハX光線ニ對シ三〇—三五時間不透明トナル。
- (ニ) 「プロミン」又ハ「ヨチン」ハ靜脈内注射後一六—二四時間ニテ最高濃度マデ濃縮サル。

(ホ) 膽囊陰影ヲシテ最濃厚ナラシムル「プロミン」ノ濃度ハ〇、六%ナリ、而シテ膽囊ニ入ラザル膽汁中ノ「プロミン」量ハ平均〇、二%ナリ。

二、陰影ノ消失

(イ) 「プロミン」又ハ「ヨチン」色素靜脈内注射後三〇—四〇時間ニテ膽囊ヲ去リX光線ニ對スル陰影モ亦同時ニ消失ス。

(ロ) 「プロミン」又ハ「ヨチン」ノ大部分ハ再び膽囊管ヲ通ジテ排出サル。但一小部分ハ囊壁淋巴管ヲ經テ排出サル。

(ハ) 故ニ膽囊管ヲ通ジテ膽囊ニ入リタル如何ナル物質モ再び膽囊管ノ通過ヲ許サレズトスル說ハ當ラズ。(由芽)

レントゲン放射ノ腫瘍ノ「ヒヨレステリン」含量ニ及ボス作用ニ就イテ

Die Einwirkung der Röntgen Strahlen auf den Cholesterin-gehalt der Krebswülste.

von Dr. A. H. Kofko und Dr. Z. M. Carrea.

Krebsforschung 15 XII. 1924 S. 79

著者ハ自分ノ實驗ニヨツテ、「レントゲン」放射ニ依リ癌腫患者ノ血清ニ一定ノ物理化學的ノ變化ヲ起シテ來ルモノデアツテ、殊ニ「リポイド」ノ中ノ「ヒヨレステリン」ニ對スル影響ガ著名デアル。即放射ノ後ニ於テ「ヒヨレステリン」含量ガ非常ニ減少スル、然モヨク觀察スルト芳香族ノモノガ減少スルコトヲ確メタト言ソテキル、其所デ著者ハ此ノ變化ガ、腫瘍中ニ多量ニ遊走シ來レル「ヒヨレステリン」ニ對スル直接ノ作用ニ依ルモノカ、ソレ共「ヒヨレステリン」ヲ作ル身體組織ニ作用シテ、起ルモノカヲ確メル爲メニ、同ジ狀況ノモトニ飼養セラレ、同ジ様ニ肉腫ヲ生ゼシメタ六匹ノ白鼠ヲ擧ンデ、其半數ニハ體ハ除外シテ腫瘍ノミニ「レントゲン」放射ヲ爲シ残り半數ニハ腫瘍ヲ除外シテ體全體ヲ放射シタ然スルト、腫瘍ノミ放射サレタル白鼠ノ腫瘍ハ三時

間後ニハ放射前ニ比シ、腫瘍ノ百分ノ量ノ「ヒヨレステリン」減少ヲ起シタルニ他方カ、ル明ナ變化ヲ起サチカッタ。

是レニ依テ、先ノ血清ノ變化ハ腫瘍中ノ「ヒヨレステリン」ニ及ボシタ直接ノ影響デアツタコトガ肯レル。亦「ヒヨレステリン」ノ作用ハ腫瘍ノ發達ヲ好都合ニスルモノデアアルコトガ理解サレル。亦「レントゲン」放射ヲ腫瘍細胞ニ行ヒテ起ツタ破壊作用ハ、原形質ガ自己ノ發育ニ不都合トナレル一系成「ヒヨレステリン」ヲ消滅セシムル生物化學的ノ一現象ト見得ラル、ト著者ハ言ツテキル。(赤藤)

日光ト日光療法

The Journal of the American Medical Association
May 16 1925.

Sol est remediorum maximum「ガイウス」プリニウス「ガ日光ニ治療上ノ力ヲ認メテ云ツタ言葉ガアリマス、彼ノ言葉ハ即チ疾病ヲ治療シ豫防スル上ニ於テ太陽ニ價值アルト云フ舊來ノ信條ヲ示シテ居ルノデアリマス、事實醫學者モ又俗人モ時ヲ經ルニ從ツテ戶外生活ノ明カナ効果ヲ太陽ノ光線ニ歸シテ居リマヘ、然シ尙日光療法ハ經驗的ノ成績ニ止ツテ何等學術的ニ證明セラレタ立派ナ理論ト云フモノハアリマセン、モットモ「フィンゼン」最初ノ實驗殊ニロリーヤ氏等ガアル局部的結核ニ治療ノ目的デ直射日光ヲアテ、成功シタ事ナドハ是ノ問題ニ可成リノ注意ヲ惹起シマシタガ、光線ノ細菌撲滅作用ガ云ヒ出サレタ事ガソノ後ノ研究ノ一ツノ有力ナル道シルベトナツタノデアリマス、都合ヨキ時ハ紫外線ハ五六秒ニシテヨク水中ノ「バクテリア」「プロトゾエン」ヲ殺ス事ガ出來マス、又、日光ニヨツテ起サレタ皮膚ノ潮紅疹及ビ代謝機能ノ増進ト云フ事ガ「ワクチン」ノ皮下注射ノ如ク疾病ニ對スル不感受性ヲ作り皮膚障害ノ防禦作用ヲ營ムト云フ事ニ最も重大ナル役ヲ努メテ居ルト論セラレテ居マシタ、進ンデハ光線ノ生物學的ノ作用ノ研究ニヨリ直射日

光ニヨルカ、或ハ他ノ方法ニヨツテ紫外線ニササレルト云フ事ガ動物デモ人類デモ非佯僂病的ノ要素ノカケテル時ノ影響カラマヌガシメルト云フ事ガ確實トナリマシタ、進ンデハアル食物ハテラサレテ居ルト云フ事ニヨツテ既ニ非佯僂病的ノ性質ヲ帶ビル事ガ出來マス、ヘッ氏等ニヨレバ植物性ノ油ガ紫外線ノ放射ニヨツテ作用サレル時ハ非佯僂病的ノ要素ハ非酸化ノ部分ニ制限サレル相デアリマス尙進ンダ研究ニヨルトカ、ル油カラ得タ「フィトステロール」ハ佯僂病ヲ防グ力ナキモヨク前述ノ方法デ非佯僂病的ノ能力ヲ得ル事ガ出來マス、又血液ノ殺菌力ニ於ケル放射線ノ影響ニ關シテナサレタ最近ノ實驗ハカ、ル事ヲ物語ツテ居マス、即チ動物ノ皮膚ヲ紫外線放射ニサラス時ハ血液ニ殺菌撲滅ノ能力ヲ増進サセルト云フ事一方皮膚ニ炎症ヲ起サセルニ充分ナル作用ハ熱線ト同様ノ結果ヲモタラスト同様ノ結果ガ人類ニヨツテモ認メラレテ居リマス、試験管ニ於テ血液ニ放射サシテ研究シタ所ニヨルトカヘツテ殺菌ノ性質ヲ破壞シ他方ニ於テ是ノ放射サレタ血液ガ循環系ニ入ルト殺菌ノ力ヲ増進サセマヘヒル氏及コレブルツク氏ノ研究ニヨレバ炭素弧燈水銀蒸氣燈ヨリ出ル光線モ血液ノ殺菌ノ効力ヲ増スト云フ事ガ發見サレマシタ、コノ結果ハ白血球ノ機能増進ニ歸スル事ガ出來マヘ、是ノ事ガ結核ソノ他ノ疾病ニ對スル日光ノ効力ニ於テ重要ナ役ヲツトメテ居ルノデアリマス。然シ過度ノ浴光ハ適度ニ行ツテ得タ血液ノ機能増進ヨリモカヘツテ大キナ程度デ惡下ヲ來シマスカラ治療ノ目的デ放射サセルニハ注意シテ適度ニシナケレバナライト云ノ事ガ實驗上證明サレ又臨床的ノ經驗ニヨツテモ一致シタ意見デアリマス。(濱谷)